

essais こころみ 2024年5月

2024年5月1日(水) 雨

昨日も今日も雨。気温はぐっと下がり、17℃前後。雨のおかげで新緑が映える。薫風五月、しばらくいい季節。街路樹も瑞々しく、大阪市内なら御堂筋は銀杏の新緑が見ごたえあり。5日は「立夏」。

— 「自己許容の甘さ」 —

長寿の経営者の訃報に接すると、やはり人間は〈労働〉が大事だと感じ、短命で逝った人には〈労働〉の過酷さを想像し、それにしても、人間の寿命というのは、どう決まっているんだろうと我にかえる。

個人的には自分なりに寿命を区切ってあるから、残りの年数は具体的に数字で出る。といっても、実際どうなるかわからないけど…、という程度にとらえているから、のんびりしたもの。

いや、のんびりしているようで、一方では、そのうち、ジタバタするんだろうなあという予想している。それもこれも総合して、つまるところ、“為るようにしかならない…”とも考えられるのは、心のつよさか、それとも、「自己許容の甘さ」か。

そういえば、『「割り切り」とは魂の弱さである』（亀井勝一郎）。「割り切り」と「自己許容の甘さ」に通じそうな、そうでなさそうな。通じるとすれば、「心のつよさ」ではなく、心の弱さになるなあ…。

— 5月1日の『中井久夫集3』より —

私が読み込んだ本は、表紙を見ると、その内容だけでなく、時にはページの視覚像が現前する。私はある時読み馴れた本を記念にひとに差し上げて同じ本の別の版を買った。

一ページ開けて、既知感と未知感の奇妙な混合が私を襲い、いたたまれなくさせた。あるページはこの文で終わらなければならず、文はこの活字の形、大きさ、黒さで、この質の紙に印刷されていなければならなかった。

私は、結局、交換を申し出て、長年の私の「索引」は私のところに戻った。しかし、私の蔵書のすべてが、いつも私にその内容を明示しているわけではない。そのようなことになれば私は崩壊する。

2024年5月4日(土) 晴れ

よく晴れている。大型連休後半、昨日から明日までは晴天が続く予報。空気もカラっとして、薫風五月らしい日和。存分にリフレッシュを。

— 「間」 —

ICレコーダーが急にPCにつながらなくなった。ダイレクト接続できるUSB端子がどうやらダメになったよう、あの手この手と試したが、PCに差し込むと、警告音と同時に電源が切れる。もう、あきらめた。

トラブル処理の方法をさぐるためにPCの設定やアプリを見直していて、アプリのサウンドレコーダーを見つけ、試した。これまであまり気にとめていなかったけど、これでもいけるはずと、やってみたら、いけた。そりゃ、そうだ、なぜもっと早く使わなかったのだろう。

パターン化すると、それに慣れて、ラク。それが急に遮断されると、余計な時間を使い、なにより少なからず精神的ストレスになる。でもそうやって、いま一度フラットに物事をみる、考えることになる。そこで、“そういえば…”と別な可能性を見つけたりする。

ぜんぜん次元は違うけど、「中井正一」の「間」の話を思い出す。

「間」は時間にも空間にも用いる。これはまったく日本的なもの(略)。前の時間がそのまま流れているのは滞っているのである。切って、捨てて、脱落して、新しく生まれるからこそ生きているのである。「間」というのは、この生きていることを確かめる時間の区切り、切断、響きなのである。

2024年5月4日（土） よく晴れた日の夕景がしぶい



— 5月7日の『中井久夫集3』より —

「予感」と「徴候」とは、すぐれて差異性によって認知される。したがって些細な新奇さ、もっとも微かな変化が鋭敏な「徴候」であり、もっとも名伏しがたい雰囲気的な変化が「予感」である。

予感と徴候とに生きる時、ひとは、現在よりも少し前に生きているということである。

2024年5月8日(水) 曇り

昨日は雨、今日は曇り。気温がぐっと下がり、何をどう着るか、迷った。なんども寒暖差に見舞われるから、免疫力が低下して体調をくずしやすい。とにかく油断せず、寒暖差をカバーできるような工夫をしよう。

— ほどほど —

仕事も朝型にシフトして、夕方は早めに帰る。夕方の電車はけっこう混んでいるが、朝は空いている。停車ごとに乗ってくる人も降りる人も少ないから、一人一人が目につく、なにせスマホに目をとられていないから。

“なぜ、そうなんだろう…”。地下鉄車内のドア側に立ってホームに向いているとき、左から女性が歩いてきて、出口へ向かう姿が目の前をとおりすぎた。ほんの数秒だったけど、まじまじと見てしまった。

年の頃は50代前半、ひよっとすると手前かもしれない。会社員で事務職の感じだが、どうしてももう少し身なりをかまわないんだろう…という気にさせるものがあった。同時にそれどころじゃないんだろうとも想像した。

大したことをしなくても、髪を少し整えるだけでいいのに、それだけで十分なのに、そこに気がいかないとすると、やはり、何かあるのでしょう。そういえば、美容室へ行く人は元気な証拠と美容師の人が言っていた。

あまり華美にするのも、何かあるだろし、ほどほどが一番健康的か。かつて日経の連載に「ほどほど健康術」というコーナーがあった。ほどほど、中庸、バランス。健康、健全は、そこにあり？

— 5月8日の『中井久夫集3』より —

「索引」は過去の集成への入口である。「余韻」は、過ぎ去ったものの総体が残す雰囲氣的なものである。

余韻と索引とに生きる時、ひとは、現在よりも少し遅れて生きている。

— 5月9日の『中井久夫集3』より —

舌には舌癌を除いて病気は大してない。(略) 中医学が「舌を全身の鏡である」というとおり情報が集中している。近代医学は大きな病気がない場所では発達しないのである。こちらの側の盲点だ。私なりの納得である。

(略) ひよっとすると中国文化では詩を作ることが人間の条件ではないだろうか。文化大革命の時にも教養人は九月九日重陽の日には古式にのっってひそかに丘に登り詩を作ったと聞く。

2024年5月10日(金) 晴れ

日の出時間が4時台に入った。早朝からよく晴れていたから、5時半ごろには、少し前に7時頃の雰囲気だった。朝のうちはちょっと肌寒い感じだったが、しだいに初夏の陽ざし照って、風もあり、まさに薫風五月、清々しい一日。

— はざま —

今朝の起きざま、やけに明るいなあと思った。日の出時間、4時台に入ったか。実際4:59だった。大阪の日の出時間は「夏至」を待たず、来月6月半ばに反転する。ひと月で6月、今年も半分がおわる。

これぐらいになると、年末までの動きはある程度みえてくるし、予定も決まってくる。不確定要素はあるけど、経験的に、どこかで想定の範囲という感覚もあって、むしろその不確定要素を歓迎する面もある。

それが負の要素が大きすぎるとリスクイだが、そうでない限りは緊張感が生まれ、気がひきしまり、結果的にそれなりの学びをするもの。とはいえ、それも少し時間が経ってからだけ。

さて、個人はそれぞれの感じて年末におけ日常を過ごしていくが、今日の朝刊を読み、世界各地で起っていることを知るにつけ、わたしたちは今どの狭間にいるのか、歴史年表を眺めているような気分になった。

— 5月10日の『中井久夫集3』より —

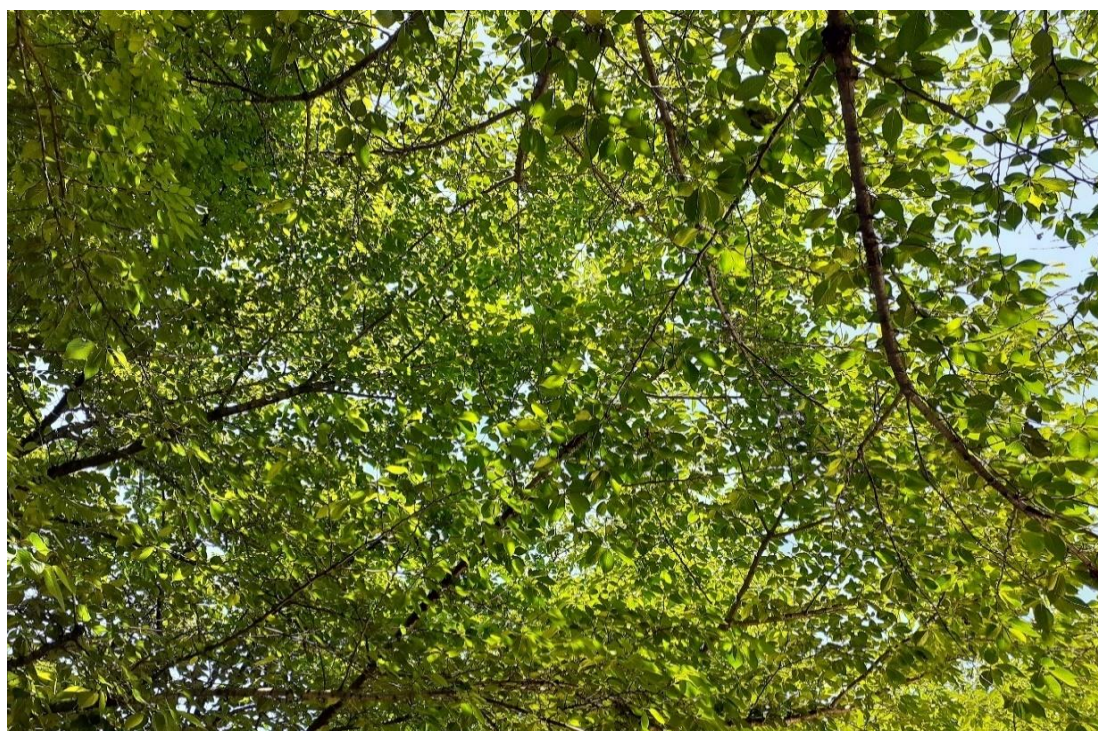
サリヴァンの信念は、「重症の患者と話すことがどこか患者のためになっている」ということで、当時全く新しい考えであった。

しかし、患者が「せんせいは私を助けようとして下さっているのですね」というと、「ちがう、私は君のおかれている状況に何があるのかを知りたいのだ」と答えている。

とくに妄想内容やその根拠よりも、その始まりの前後の事情を明確にしようと努めている。精神医学を対人関係の学とみなす始まりであろう。

2024年5月11日（土）

晴の土曜、新緑の下でお昼ご飯



2024年5月13日(月) 雨

昨夜から雨、今日は気温がさがり、ちょっと冷たい雨。明日はよく晴れるようで、雨あがり、新緑が冴えるはず。明後日もまずまずのお天気の予報、葵祭もにぎわいそう。

— 自分を手なずける —

「憂うつでなければ仕事じゃない」とはよく言ったもの。後回しにしたくなる仕事ほど大事な仕事、というのも、誰でも思いあたる節あり。そこで何とか気をとりなおして、態勢に入れば、意外にぱっぱと、やれるもの。

だからもっと早くやればいいのに、そうしない。意外に、難しいと元からわかっていて、自分一人の責任でやる分には、憂うつではあっても、先回りしてやれるのではないか。

案外、さほど難しくなないけど、手間がかかる、あるいは相手があること、誰かにアプローチしなければいけない場合に、「憂うつ」と「後回し」がセットになのかもしれない。

そうだとすると、自分の気持ちの問題であるから、「気をとりなおして」、やる。心技体の「体」から入る、というか、型から入るというか。出だしは鈍くても、そのうち興にのってくる。

こういうことを、「自分を手なずける」というか。そういえば、『〈偶然〉と〈運〉の科学』(SBクリエイティブ)に、「自分は運がよい」と思っている人の特徴が書かれていた。

7点ある内のの一つに、「立ち直りがはやく、不運な目にあっても、もっと悪い事態を思い浮かべたり、自分の置かれた境遇を手なずけたりして、立ち向かうことができる」。自分を手なずける、一つの方便。

— 5月13日の『中井久夫集3』より —

「わかる」ということばほど「わかって」いないものはない。われわれは何を以てわかりあえたとするのであろうか。特にロシア人を「わかる」には特別な条件があるように思われる。

(略) しかし、ロシア人のプーシキンへの畏敬となると違う。プーシキンはほとんど神であって、外国人がうかうか土足で踏み込めない聖域である。邦訳があるということさえも冒涇と感じられているようだ。

ロシア語でなければプーシキンがわかるはずはないとロシア人はいう。ロシア人とわかりあうのは絶望的だと感じる時だ。しかし、これは日本人が俳句を語る外国人に対する態度に少し似ている。

— 5月14日の『中井久夫集3』より —

手近なものは言語で表現しにくいものだ。飛行機が上昇する時の感覚とかメロンを食べる時の感じといったものは表現できない。

世界の味わい、意識の木目、身体の手ざわり---そういったものは確実に「わかる」のだけれどもコミュニケーションできない。

問われれば「いい感じです」とか「苦しいです」とかで済むのは、暗黙の了解が先行しているのことが…(略)

2024年5月14日(火)

奈良で旧知の二人と4年ぶりに会って話す、場所は成務天皇御陵
絶好の日和、ロケーションでした!



2024年5月15日(水) 曇り

午後になり、すっかり曇り空。大阪の山浴いでは雨も少し降っているよう。大阪市内は大丈夫だろうけど、京都はさてどうか。今日は葵祭の日。

— 人それぞれに宿るもの —

昨日は旧知の二人と4年ぶりに会った。薫風五月の空の下、歴史ある場所の自然にかこまれた、でも、ほとんど人の行き来しない一画で語り合った。珠玉のひとつときだった。

10年前に仕事で出会い、何度か会ってはいたけど、それほど互いのことを話し合えていない。昨日はいい日おもてつだって、そうだったのか…と、あらためてお互いを見なおした、合点がいった。

印象的な一つ。「自分の判断は、自分だけでそうできているんじゃない。そんなことに最近思い至った」。

なにになに、くわしく聴かせてと促す。自分の生まれ育った環境、親をはじめ周りの色々な大人や人たちの中で自分の中に宿ったものが、判断や決断につながっているんだと、しみじみ感じたのだそう。

こういうことに気づく、はっと覚る、大事なこと。人間、一人で生きているわけじゃない、ということにも通じるか。上の代からずっとつながってきて、子どもがいる人は、これからもつながっていくことに想いをはせる。

『死生観を問いなおす』（広井良典）で著者は、人間の創造性や文化の源泉は親と祖父母をふくめた「三世代」からなるととなえていた。「マーヴィン・ミンスキー」も同じように説いていると紹介していた。

自分の中に宿るものを好感できない場合もあるかもしれない。過去に戻ることはできないから、そうであればこそ、自己刷新、自己編集、オートポイエーシスのきっかけがある、とも言える。でも、少々＜修行＞がいらしますね。

－ 5月15日の『中井久夫集3』より －

どんな病気でも疲れやすさがあるのは、結果的には病人を休養させるための自然の知恵といえよう。

実際には、さまざまな身体の不調の信号として疲れやすさがある。風邪から癌まで、とにかく目にみえて疲れやすささせるものだ。同じ部分があるのだろうが、他の病気の場合との共通部分はどれだけのだろう？

いま燃えさかっている病気そのものというよりも、それを経て後の消耗だという部分もあるだろう。この消耗がなかなか回復しない人が何病でもあるものだ。大病の後には深い消耗があって不思議ではない。

疲れが日々の負荷に応じて動揺するようになればだいぶん回復したとみてよいくらいである。

2024年5月16日（木）

ちょっと息抜きに、すぐ近くのタワマンの植栽をみに
なんと、アジサイが咲き始めていた！



－ 5月16日の『中井久夫集3』より －

あんまり疲れると、疲れているかどうかもわからなくなる。身体の感じ
がつかめなくなるのだ。こうなるとメーターなしの自働車を運転している
ようなもので、知らない間に無謀なことをしてしまう。

「破滅的自己拡大」から破綻に至る、生活臨床でいう「能動型」の中
には身体の感じがつかめない人がいる。逆に身体の感じがつかめてく
るのが回復の第一歩ということがある。

2024年5月17日(金) 晴⇄曇

－ しゃべると話す －

こちらが意図せず、他者の会話を聞くことがある。カフェなどで一人食
事している時に隣のテーブルの話が聞えることが多々ある。

おしゃべりと会話はちがうか。念のため調べていると、「しゃべる」には、
「口数多く話す、口に任せてべらべら話す」の意味がある。会話の「話
す」には「言葉で相手に伝える、告げる、語る。相談する」の意味があっ
た。

どちらも長く聞いていると、気になってはくる。でも会話の方はそのうち
バックグラウンドミュージックのように耳がとらえて、自分の世界にもど
る。

おしゃべりの方はなかなかそうはいかない。同じようなことを堂々巡り
でしゃべっているように聞えてきて、いつになったら終わるのかなという
気になってくる。

元々自分ではおしゃべりをあまりしないから、そう感じるのかもしれない。
会社員時代も女性のあまりいない組織にいたから、お昼休みに女子
がおしゃべりしているという場面の経験がほとんどない。

転職の狭間で派遣会社からいった先が女性ばかりのところで、ランチ
を一緒にするのに、身を持って余した。珍しく話したら、だんだんと皆の表
情がかわってくるのがわかった。

乳がんの話題になって、自分の考えを話したのだった。これはマズイ
か?と感づいて、話を早めに切り上げたが、終わったとたん、一人がだる
そうに拍手しながら、「はいはい、ご講義ありがとうございました」。

〈住む世界〉がちがうことを直感した一瞬であった。

－ 5月17日の『中井久夫集3』より －

いつも疲れている人にはこういう場合もあるだろう。回復期というもの
は、少し元気が湧くと、その元気を使い切りたくなるものだ。

その結果、元気の泉はいつもかれているということがある。タクシー会
社の持ち車がいくらあっても、全部出勤させれば、車庫には予備車がな
く、臨時の対応はできない。元気とかゆとりとかは少し”溜めて”から使
うとよいようだ。

その間「待つ」ということが周囲にも本人にもとてもじれったいと思うが、これは大事なことのように思う。

2024年5月20日(月)小満 曇→晴れ

朝一番は曇っていたが、徐々に晴れてきた。気温は26℃まで上がるようで、雨上がり、たぶんちょっと蒸し暑くなる。今週はまずまずのお天気、けっこう暑くなりそう。

— 花暦 —

今日は「小満」。「こよみのページ」によると、次の「芒種」までの期間をさして、「草木など生物が次第に生長し生い茂る頃。西日本でははしり梅雨が現れる頃」。

この「こよみのページ」にはけっこうお世話になっている。初めて知ったのはいつだったか、このページがいつからあったか、サイトでチェックしてみると、2000年に開設されている。

たぶん、すぐぐらいに検索してヒットした。先々の旧暦も計算して表示してくれる。お世話になっている人は多いようで、20周年の時だったか、日経の文化面に紹介されていた。

暦にまつわる雑学も豊富で、今は「花暦」が載っている。中国の清時代につくられ日本に伝来したそうで、江戸時代と現代のものが月ごとに紹介されている。

それを見ながら思いたったのが、『花を旅する』(栗田勇 岩波新書)。こちら月ごとの花をあげてエッセイが書かれている。ひょっとして花暦に合わせたのかと見比べたが、そうでもなさそう。

この本は2001年3月に出ていて、知人に勧められて読んだ。読んで一番の収穫は「象鼻杯」を知ったこと。大きな蓮の葉を盃に長い茎を口にあて、お酒を飲むというもの。

そんな風流な愉しみがあるのかとびっくりした。さっそくネットで検索してみると、どこどこでやっている。そのひとつが、宇治の三室戸寺、これまでに3、4度行った。

なかでも最初の時がこの風流を味わうのに絶好のシチュエーションだった。正確な日付はいつだったか、自分の旧サイトの記録をあたってみる。ああ、2002年7月7日(日)、七夕の日、すっかり忘れていたけど。こういうとき、自分おサイトがいいデータベースになる。

当日はいつにもまして湿度が高く、薄日がさして、ほんとうに蒸し暑かった。でもそれがよかった、本堂前にずらっとならぶ大きな蓮壺を写真にとると、蓮の花のおこうに見える本堂もすべてがウェールにかかっている。

これは天国…。テレビなんかで天国を表すときのぼやっとした映り方になっていた。その写真も今では自分の手元になく、ネット宇宙のどこかに浮遊しているはず。でも頭の中に残っている、その時の感覚とともに。

宇治の三室戸寺はアジサイでも有名。これから人が多くなるかもしれない。ちなみに、今年の象鼻杯は7月13日(土)午前9時から12時とか。

－ 5月20日の『中井久夫集3』より －

休むのが下手で疲れているという場合もあるだろう。銀行や役場では人の働いているのを観察できるが、うまい具合に小さな休みや気分転換をはさんで動いている。

植木屋さんのように自分のペースで働ける度合の大きい人はなおさらで、枝ぶりなんかをじっとみても、こちらがじれったくなったころ、ちょっとまた一枝をはさみとる。これがかえって「きびきび」という感じを生んでいる。

(略) 疲労感一つにもいろいろ考えの種がある。感覚の質の差は科学的検討にかかりにくいだが、知っているのは知らないにまさること大である。医者なら薬を増やし、精神療法家ならインテンシヴにやりたくなるが、これが問題を複雑化するだけということもあると私は思う。

－ 5月21日の『中井久夫集3』より －

ロンドンを発つ朝、ヒースロー空港は霧であった。独特の腰高なタクシーが意外な高速力を発揮してあつという間に着いてしばらく、「空港閉鎖、無期限」という標示が出た。

しかし信じられないほどに空港の群衆は静かであった。怒号はもちろん、どよめきすら起らない。係員に詰問する人すらない。

ばたばたおいう音がして食堂が開いた。「無料で何をとってもよい。どこへ持って行って食べてもよい」とスピーカーがなる。人びとはゆっくりとカウンターに歩み寄っては盆に思い思いの皿を載せて外へ散ってゆく。皆慣れたものである。(略)

連中は待つのもうまいが、待たせるのもうまいなと私は独りで感心していた。さすがジグソーパズルやクロスワードを発明した文化だけある。

2024年5月22日(水) 晴れ

うすく流れる雲が青空のいいアクセント、5月の気持ちのよい日和。沖縄はすでに梅雨入りしたが、近畿はしばらく猶予あり。そういえば先週末に沖縄へ一週間の旅にでた人がいる。愉しめているかしら。

－ 見えない仕事の見えない力 －

朝の〈おつとめ〉の音読でいま読んでいる「中井久夫集3」、先日読み終えたのは、『見えない病気の見えない苦勞』。見えない、見えにくいものの大事さを説くのは、「老子」や「孫子」、「モンテーニュ」に同じ。「今も昔も本当に偉い人は同じようなことを言っている」とは、よくいったもの。

「病氣」を仕事に入れ替えて、「見えない仕事の見えない苦勞」もいえる。職場でのことなら、目に見える仕事のすき間、またはつなぎの些細な仕事が、全体の仕事をスムーズに進めているものだけど、それを買って出てやる人は少ない。業務の明確化はよくいわれるところだけど、あいまいな部分を盛り込んでおくのがよさそう。

「苦勞」を力にかえることもできる。「見えない仕事の見えない力」となるけど、力になるから、苦勞が付きものということにもなるか。まずは、見えない仕事の力に気づくところから、始まるのだろうけど。

－ 5月22日の『中井久夫集3』より －

待つ能力、逆境への耐性、機会を捉える能力、これらなくしてはそもそも船、特に帆船は操縦できない。英国が海洋国でありうるための不可欠の美質である。(略)

医師も人を待たせる。待たせるからには、待たせる作法があろう。せめて待合室に時折顔を出すなどの工夫が必要だろう。待合室には特に緊張を要する患者がきつというはずだ。

これは初歩であって、一般に医師の仕事には深く「待つ能力」「逆境に耐え機会をとらえる能力」を要求するものである。しばしば「待ちの政治」ならず「待ちの医学」が必要である。

それは、単純にいつでも反射的に即刻病氣を治そうとするのではなく、往々病氣をもっともよい形、後ぐされない形で経過させることを目標とするものである。

この思考は東アジアの医学思想であって、西欧医学では明言されていないものだが、さて「待てない文化」に深く浸透されたわが国ではどうであろうか。

－ 5月24日(音声)の『中井久夫集3』より －

往診先では自分の土俵を離れるだけでない。異質な家庭というものの中にはいって、それにのみこまれないようにしなければならない。

さらにその家庭は、病人、それも往診を必要とするのであるから、ある程度以上の重症の病人をかかえて例外的な混乱状態になっている家庭である。そこにはいって、その混乱の中に一時的にせよひとつの秩序をつくりださなければならない。

－ 5月25日(音声)の『中井久夫集3』より －

かりに往診先の患者が昏睡状態ならば、家族はしずかまわりにすわって憂わしい顔をしている。泣いている人は隅に退くのがふつうだ。医師がくると人の輪がさっと退いて、医師の道をあける。脈をとり、瞳孔を検査し、血圧をはかる。

むろん、その間も医師の五官はさまざまな情報を集めてるのだが、ひととおり検査をしおわると、周囲から声ともない声で「どうですか」と気遣いに満ちた問いが押し寄せてくる。

医師の答えはたいていこうだ。「いつからこうなのですか」。以下はいうまでもないだろう。これは、ほとんど荘重な儀式である。

2024年5月27日(月) 雨ときどき曇

昼下がり、雨はやんで少し明るくなってきたけど、晴れることはないはず。予報では明日にかけて雨。気温は25℃前後だけど、午後のいつとき蒸し暑かった。椅子の座面に竹製の敷物出番。ひんやりして気持ちいい。

— 「書くのが苦手で…」 —

専門職に共通する業務に報告書づくりがあるのではないか。なかでも人を支える仕事の専門職はクライアントごと、相談実施ごとに、頻繁に書くことになる。

「書くのが苦手で…」と、最近久しぶりに会った人がそう言うので、書くのは慣れの問題だからと、まずは軽く返した。すると、もっと手前の問題として学力がないのでと、真面目な顔で言うので、誰も同じようなものですよと本心で応えた。

とにかく書く習慣をつけましょうと勧めた。日常の中で何か気にとまったことの、事象は2割、そこから自分の感じ、考えたことを8割、そんな目安で書く。追って聞くと、さっそく始めたらしい。

仕事上の報告書などは、いずれAIが作るようになる。今の段階でも何かテーマを決めて、エッセイ書くように指示すると、客観的なそれなりの文章をAIがつくる。

これからは主観がものをいうのではないか。自制と自律が重要になるけど、その人だから考えられること、言えることが意味をもってくる。だから自律的に、他者の意見を尊重し、かつ自分の考えをしっかりと語る。

書く習慣を勧めた人には、語るべきものがたくさんある。自分の内にあり、仕事をとおして外の世界についても、ある。今は未だその気はないようだけど、いずれ本にしてまとめたくなるのではないか。書く習慣がすっかりつけば、その可能性はかなり高くなるはず。見守るとしよう。

— 5月27日(音声)の『中井久夫集3』より —

井戸に落ちようとする子どもを目撃した人間の中に動くものを孟子は「惻隱の情」と名づけて性善説の根拠とした。私のいうものはそれに近い。

しかし、子どもに続いて井戸に飛び込んでも何にもならない。何が一番有効かを考えなければならない。そして、ある決定的な瞬間には、勇気と卑怯と、一歩前に入るかその場で立ち去るかは紙一重である。電車の中で医師を求める放送の時に医師がいつも感じる葛藤である。

(略)。往診を受けるか断るかを迫られた時にも、この種のためらいの瞬間はある。もっとも、装備は持ってゆけるし、往診の途中に心の準備はできる。あらかじめ与えられている情報は車内放送ほど雲をつかむようなものでないのが普通である。

しかし、家族と物見高い群衆とは非常に違う。(ついでにいえば、「協力者」になるか「物見高い群衆」にまわるかも、瞬時の決断であり、わかれ道の時点ではしばしば紙一重である)。

何が違うのか。単なる惻隱の情を超えた、家族の連帯性である。

－ 5月28日(音声)の『中井久夫集3』より －

医師を支えているのは慣れではなく－少しはそれもあるかもしれないが－「代替の効かない当事者である」という意識である。独りで緊急の手術をしなければならなかった時、途中で、今もしメスを放り出して号泣できたらどんなに楽だろうという考えが頭をかすめたのを思い出す。

この当事者意識が、往診に際して、家族の感情に同調しようとしてその一歩手前で立ち止まるというか、両者の交錯する危うさに立つというか、そういう位置を医師に対して指定する。

こういう危うさが医師というものを崇高にも下劣にもみせ、等身大の医師をみえなくさせている一要因である。江戸時代の階級性においては僧侶とともに医師は士農工商の外に置かれた。

2024年5月29日(水) 晴れ

昨日は大阪でも雨が強く長く降った。午後からは急に冷え込み、今朝もちよっと寒かった。その後気温が上がったが、まったく暑くなく、清々しい五月の晴れ間。月曜はやけに蒸し暑かったから、ほっとする。せっかくだから買い物ついでに昼散歩した。

－ 「語りえぬことについては、」－

今朝読んだ「中井久夫集」に「ワイトゲンシュタイン」の言葉が引用されていた。『論理哲学論』からのものかと、すぐに「中公クラシックス」の新書をざっと見てみたが、見あたらなかった。別の本かもしれない。

なぜこの本を読んだんだろう。出たのは2001年、しばらくして買って読んだ。今から思えば、2003年頃にかけて、自分の文化史、あるいは教養面の道筋ができたような時だった。その道先案内人になってくれた人がいて、今となっては感謝するばかり。

この本には少しハマった。特に記述の方法がしっくりきた。この方法を見せられて初めて自分で気づいた。1から7まで、階層構造で表現されていて、「1 世界とは、その場に起ることのすべてである」に始まり、「1・21」で1は終わる。5の中には「5・5563」というものもある。

それが、最後の7は1つだけ。「7 語りえぬことについては、沈黙しなくてはならない」。この『論理哲学論』をワイトゲンシュタインが事実上完成させたのは29歳の時というから、『男と女の生産性』のいうとおり、男性にとっては生産性のピーク期。

ところで最後の7は、『自業のすすめ』のまとめ方を決めた。書いても書いても書き尽くせられないことだと暗澹としてキーボードを打つ手かとまり、ポーっとした時に、〈降りて〉きたのだった。

この本を読んでいなかったら、完成を断念していたかもしれない。何が
さいわいするか、わからない。

－ 5月29日(音声)の『中井久夫集3』より －

医師は全体の布置の一部である。そういう者として、しかし、局面を一
時的にせよコントロールできなければならない。そうでなければ、医師は
局面の奴隷となる。

医師はこの二面性を生きるものである。大きなコンテキストの一部で
あって、しかもこのコンテキストに対して最小限のコントロールができな
なければならない。

おそらく、ワイトゲンシュタインが「自分は世界のまったき断念において
世界をある意味で支配することができる」とノートに記したような機微
があるのであろう。

昼に買い物がてら、東横堀川の遊歩道を歩いて、天満橋方面へ





－ 5月30日(音声)の『中井久夫集3』より －

(往診で) そもそもはいることを拒絶される場合がある。しかし、そのほうが問題は単純である。それは単身者であった。ある同僚は、家庭訪問を依頼されて、はいるのを拒絶された。彼は次の日、声をかけて、返事のないまま戸口に薬を置いてきた。

一週間後、再び行った。薬はそのままであった。彼は持ってきた薬と取り替えた。内容は同じであったが、取り替えることが重要であると感じたからである。

何週間かたって、ついに薬がなくなる日がきた。彼は土間にはいって框に薬を置いた。主はじっと彼を見て何もいわなかった。しかし、最初のように怒声は返ってこなかった。

結局、主との間に半年かけて治療関係が成立するのだが、それは、餌づけではなく「人づけ」、つまり主に「人間の中にはそれほど有害でなく強引でもなく限度内であなたの役に立とうとしている者がある」ことを強制性なしに伝達しえたことにある。

しかし、ふりかえれば、こういう例はほとんどすべて単身者の例である。家族が精神科医を迎えるという場合には、それほど単純でないのが普通である。

2024年5月31日(金) 雨ときどき曇

今夜は下弦の月、夜には晴れる予報になっているから、望めるか。五月も今日でおわり、6月にはいり梅雨の季節を迎えるが、昨日のニュースでは今年の梅雨入りはおそいらしい、沖縄はすでに入っているけど。異常気象が常態化しているから、さて、今年の梅雨はどうなるか。

－ 想定外のこと －

日経の「私の履歴書」今月5月は囲碁の名誉名人「趙治勲」、今日の朝刊が最終回だったが、冒頭に「想定外の事態が起ってしまった」。なんとガンが見つかったらしい、「本稿に取り掛かってから」とか。

想定外のこと。今朝の〈話す〉で話したことだった。仕事でもプライベートでも想定外のこと時々おこる。歓迎すべきものもあれば、できれば直面したくないものもある。

中には未だどちらに傾くかわからないものもある。自分の対処したいという場合には、少し間をおき、考えてみる。もしこうすると、こうなって、ああすると、こういうことも予測できて、等等。

脳は実に瞬時につながり、選択肢に応じたその先の可能性を描きだす。その一つを選べば、他の可能性はすてることになり、自分史を書き換えるかもしれない種を逃すこともあり得る。

でも一旦決定してしまえば、『自己成就の効果が期待できる』というから、“あの選択は正しかった…”ということになるのでしょう。ともあれ「想定外」は、できれば歓迎あるいは自分で決められることであってほしい。

－ 5月31日(音声)の『中井久夫集3』より －

往診が起る時というものは特別の時である。家族が呼ぶにせよ、周囲の事情がそうさせたにせよ、あるいは他のどのような動機によってにせよ、往診が起る時は、ふつうに流れている時ではなく、何らかの意味で「今だ」という時である。医師はそれを生きねばならない。そして生かさねばならない。